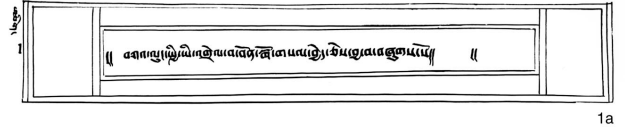


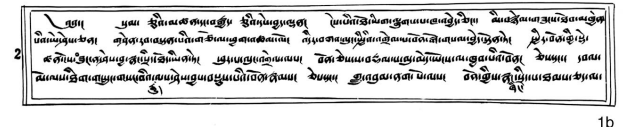
ボン教はチベット土着の宗教とされている。敦煌出土チベット文書中に明らかになる古い時代のボン教は、死者と生者との間を仲介するシャーマン的な役割を演じていたことが知られているが、11世紀以後は仏教の教義をその中にとり入れて理論武装して教義体系を整えるに至る。この新しいボン教(仮に「新ボン教」と呼ぶ)を仏教の一派と考える学者もいる程である。しかしながら、子細に吟味すると、仏教の教義に完全に同化している訳ではなく、教義の枠組みを仏教から借りながら多くの土着の要素をその中に残していることが解る。どこまでが仏教の影響なのか、どこからが土着の思想なのかを明確な形で明らかにすることが、現在の研究者の主要な興味の一つとなっている。

仏教は中央アジアを通して中国に伝わり、朝鮮半島を経て日本に伝わるが、夫々の地域で信仰される仏教は、同じ仏教を名乗ってはいても、もとのインド仏教とは似ても似つかないといっても過言でない程の側面を有している場合がある。一方、セイロン(現在のスリランカ)からタイやビルマ(現在のミャンマー)などへ伝わった所謂南方仏教も微妙な点でもとのインドの仏教から変容を遂げた痕跡を持っている。チベット土着の宗教と言われるボン教が、ある時期から仏教の教義を取り入れながら土着の要素をその中にはめ込んでいる様子は、つまり、名前はあくまでボン教を名乗りながら多くの仏教の要素をその中に含んでいる点は、上の仏教の伝承過程に於ける変容と合わせ考える時、人類の宗教史上或いは思想史上実に興味深い意味を持っている。

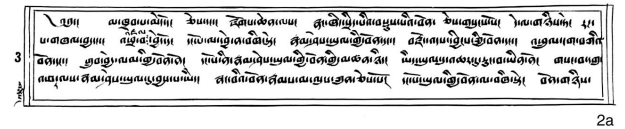
写真左は14世紀の新ボン教の教義書『ボン門明示』の写本(北インド, Himachal Pradesh, Dolanji ボン教寺院所蔵)。写真右上は、同写本を基にして筆写されたと思われる近年のインドの複製出版本。下はこの『ボン門明示』冒頭部分のシェンラブミボに対する帰敬偈のテキストと試訳。敦煌出土チベット文書中では単に祭祀執行官の一人として名前が見えるシェンラブミボは、新ボン教の中では仏教の仏陀に相当する絶大な地位を与えられている。



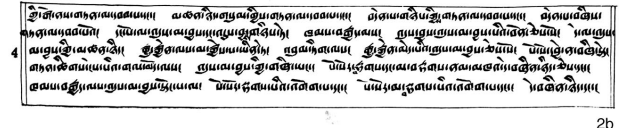
1a



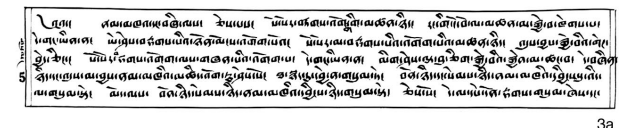
1b



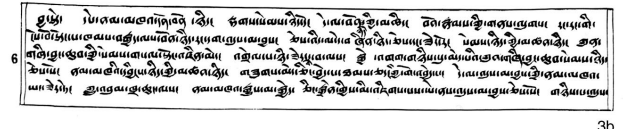
2a



2b



3a



3b

sum cu'i mtshan dang brygad cu'i dpe byad ldan //
 nges pa'i tho yig lkugs pa kha 'byed cing //
 mi bsnyel gzungs thob mkhyen pa'i ye shes can //
 gShen rab bstan pa'i gtso la phyag 'tshal lo //

「30(実は32)の身体的特徴(三十二相)と80の副次的特徴(八十種好)を具え、[身体に描かれた45の]根本文字が言葉の不自由な人の口をも開かせる、忘れ難い陀羅尼を得、一切智者の智を有する、教えの主、シェンラブに帰命します。」

御牧克己(チベット学分野責任者・京都大学)